三十話

きづねのむがしこ、一つ。

ある年の冬、正月過きのごったけど。谷内のさやのおどさんがしゃ、小水沢の大き家の嫁取りふる舞さよばれで、雪つぼこぎこぎ登坂沢の渡りコまで来るづど。きづねコア二匹沢の水鏡コ見ながら「今日ア小水沢の大き家の嫁取りぶる舞あるづあはんて、坊さまに化げでえて、ふる舞コごっちょになるぶし。」て、さべりながら、右の耳さ枯れ葉コぴたっとはり、左の耳さ枯れ葉コはっては耳かぐし、尾ばコさ枯れ葉コはっては尾ばコかぐしてえだけど。これ見ださやのおどさんが、小水沢さ来てそのごどしらせだば「そりゃづれこぞきづねアどだ。ようし、どうしてけるが、おべでけづがれ。」てへて、すぐさま長嶺がら大きた犬三匹借えで来て、戸の冗さかぐしておいだど。

式もしまって、酒盛りコア始った頃、豆しぼりの手ぬげコかぶて、にぎょ杖ついだきづねコア化げた、坊さま二人来たけど。「よぐ来てたもた。さあさあ、まんつへってたもれ。へって祝ってたもれ。」ど、下さもおがねもでなしぶりに、坊さまどア酒コだのさかなコだの、じっぱりごちょになったど。ええ気げんになった坊さまどア、踊コおどるて豆しぼりの手のげコかぶりなおすひょうしに、耳かぐした木の葉コアパラッと落ぢで、右の耳コアピョコンと立って見えだけど。「そうら、これア坊さまでもなんでもねえ、化げぎつねアどだ。縁側の戸たでろ、犬けしかげろ。」ど、犬そうどうになたけど。きづねコアどア化げの皮はがれで、犬に尾ばコだの足だのかじらえるし、青ぐなて闇木さあがり、煙出しがらくっこやみ逃げで行たけど。

ふる舞コもしまただし、つぎの日、さやのおどさんが、家さ戻るきなて、黒坂のきづね穴の下さ、さしかがると、穴の中がらなんやら、話し声ア聞けできたたえに、こそっとそばさ寄て、聞き耳立ててえだば、「やあや、ぼんとに、ひんどえ目に合たな。危なぐ犬にかみ殺さえるがど思たおな。うしゃらしぐねたら、うしゃらしぐねたら。このままだばくやしふてなねし、八森のきづねだの、赤沼のきづねだの、山々のきづね、沢々のきづねアど、みんな頼んできて、こんにゃあの屋根で、じごくぬりしてけるべし」て、ゆべなのきづねコアどア、相談コしてらおだけど。

これ聞だ、さやのおどさん。家さ行ぐのやめで、こそっと小水沢さ引っ返して、このごど知らせだど。「それアてえへんだ。そんたにじっぱりの、きづねアどにかて、夜半中じごくぬりさえだづものア、屋根もなんも、たまたもでねえ。なんとがさねば……ん、そだそだ。」てへて、すぐさま分家のあなど頼んで、竹やりじっぱり削じてもらて、家のぐるりの軒下さ、逆さにぐるっと、立ででえだど。

ばんげめし食って、しばらぐするづど、外のくら闇轟がせで、屋鳴り震動させで、「じごごごーッ。じごごごーッ。」て、じごくぬりア始またけど。そして、明け方まで続ぐはずの、じごくぬりア、四半刻もしたば、音アなんにもしなぐなたけど。

つぎの朝まに、起ぎで外さでで見だば、冗がら竹やりさ、串差しになったきづねアどア、朝日さ照らさえで、きろッかろ、きろッかろて、逃げるもせねえ、鳴ぐもせねえでえだけど。あんまり、しぢ悪ぐ、なぼもかぼも、いだづらするど、とんでもねえ目に、合うもんだど。ドットハラエ。